

千葉大学教育学部附属中学校と World Wide Web
World Wide Web and Jnior High School attached to Chiba University.

芳賀高洋

Takahiro Haga

jtaka@k12.gr.jp

(千葉大学教育学部附属中学校および千葉学芸高等学校 講師)

K12『インターネットと教育』研究協議会)

自主的にはあるが千葉大学教育学部附属中学校(通称:ちばふ)では、1994年から学校のWWWを運用しており、日本ではもっとも早くWebページを公開した中学校である。

ちばふのWWWの運用の歴史的経緯を紹介しながら、ちばふと、WWWのつきあい方について、可能な限り正直に紹介してみたい。

キーワード: <http://www.jr.chiba-u.ac.jp/>

1. もともとの動機

ちばふのWWWの歴史は古く、その運用経過はアクロバットの如く、今から考えると冷や汗がでてくる。

WWWをはやばやと公開したのは、「デモンストレーション」的な意味合いが大きかった。表面的には、学校の先生方にはやくインターネットの重要性を認識してほしかった、と説明しているが、実際には、お金がないのでサーバや回線をただでもらうにはどうしたらいいか考えたあげく、既成事実を作ってしまうおうという、大変不純な動機である。まずは設備がないと何もできないから、どうにかしたい、という気持ちが先行していた。

2. 時代背景

千葉大学の工学部にある池田研究室は、日本で3番目(NTTとほぼ同時期)にWebページを公開したことで知られている(1993年)。たまたま池田研究室出身の先生が教育学部にいらっしやった影響で、教育学部にも早々にWWWの存在が知らされた。当時大学院に通いながら附属中学校の技術科の講師をしていた関係から、WWWの存在を知ってすぐに附属中学校のページを公開し、インターネットを中学校で利用することを考えた。当時、日本語が表示できなかったため、ページはみな英語で、全国でも数サーバ、K12の学校となると世界中を捜しても1校もなかったと記憶している。ブラウザはMosaicしかなく、WWWを閲覧することを「Mosaicをしましょ」と、今ならば聞いているこちらが恥ずかしくなるような会話がとびかっていた。

3. 注目されたWebページと注目されなくなったWebページ

インターネットの存在すらほとんど知られていない時期で、学生で、非常勤講師の身分でありながら、勝手に学校のページを立ち上げたが、誰も怒る人はいなかった。

ただし、大学の総合情報処理センターが毎月発行していた「センターニュース」に、当時のインターネットの授業の様態を勝手に掲載した時には(具体的なクラスをあげ「大変である」ことを克明に書いた)さすがに学校から注意を受けたが、WWWのことやインターネットそのものについて注意されたことはなかった。

学校ではそんな状況の中、95年のことだと思うが、まだ日本全国のWebサイト数が数千程度の時期に、日本で70番目にリンク数が多いサイトという統計がでて、一部のマニアの間では、学校が出しているページということでめずらしがられ、有名だった。ちなみに、Yahoo!がまだ商用でなかった時に、日本の学校としてはじめてK12ディレクトリにリンクを掲載している。また、海外の雑誌からメール取材で、当校のページが取り上げられたり、前橋市第4中学校に協力した核実験のアンケート調査などは世界中から2000以上の回答があるなど、その注目ぶりは今では考えられない。

この頃は、絶対数は少ないものの、学校がWebを出しているだけで、海外から交流の申し込みが殺到し、何をやるにしても注目を集めた時代である。

しかし、最近ではWebページをだしても、膨大なWebページの中に埋もれて、ちっとも注目されない。Webページ見たといって海外

からくるメールは最近では SPAM メールばかりである。

4. マスコミの影響と外圧

95 年以降にようやくインターネットが注目されはじめたが、それでも校内的には全く知られていなかった。しかし、「学校で Web を公開している」というだけで、マスコミからの取材がくるようになり、それがきっかけで、学校の管理職も WWW の公開について多少考えるようになり、「技術科のページ」とつけくわえることになった。つまり、「技術科」の責任で、研究として公開するならばよいという許可をはじめてもらったわけである。

いわゆる「世田谷事件」もかさなり、この状態は最終的には 97 年までつづき、千葉大学教育学部附属中学校として正式に WWW ページが認められたのは 97 年の 6 月からである。

日本のインターネット元年ともいわれる 97 年に、生徒校舎ができあがり、コンピュータやネットワーク設備が整備されたことも影響しているが、当校の情報教育に対するマスコミの取材も、「Web を公開しているのが珍しい」というものから「学校での利用では何が問題点になるか（特にフィルタリング問題）」という視点に変化し、取材数的にも急激に増加したことや、卒業生や附属中に入学を希望する保護者などから、当校の Web ページに問い合わせが多数あった、など、社会的な「外圧」がかなり影響している。

5. 当時の卒業生の反応

94 年に、教育学部ではじめてインターネットを利用した授業をおこなった時の卒業生が現在大学 2 年生になっており、現在もメールで連絡をとりあったりしている。当時 Mosaic の画面を紹介したり、メールを書かせたりしているが、「全く意味がわからなかった」というのが多くの感想である。以下、当時のことを覚えている卒業生が、

「モザイク触ってました。

ハッキリ言って、衝撃的でした。

その頃は英語力が乏しかったので海外のページは読むことができませんでしたが、フィーリングで「目の前に巨大図書館がある」的感覚を受けました。リンク集を辿ってぱっかりだったのを記憶しています。」

という感想を送ってきている。ただし、学校のページがあったということはよくわからなかったようであるが、貴重な体験の一つであ

ったのではないだろうか。

6. 当校の Web ページの特徴(Just in time)

紆余曲折を経て、現在の当校の Web ページの、代表トップページには 1 日 200 以上のアクセスがあり、当校のサーバで運営しているサイト全体では、数千から多いときには数万のアクセスがある。

当校の Web ページの特徴は、「計画性がなく、常に新しく、あらゆるものがあること、何でもあること」である。ある意味で特徴がない、といえる。唯一特徴的なことといえば、「リンクをする場合に連絡不要」と明記してある点である。

現在できる範囲で、子どもが興味がありそうなもの、新しいもの、提供が可能なものには、すべて飛びついてチャレンジすることをモットーに公開している。また、子どもも教師も楽しくインターネットが利用できてこそ、導入する価値があると考えている。そのため、学習効果はほぼ二の次であることは否定しない。サーバはあまりにも負荷がかかりすぎて瀕死の状態である。

やるならばとことんやるのが大切だと考えている。チャットルーム、掲示板、全教科、全生徒、全教員のアドレス情報、教育実習生のページ、PTA のページなど内部的なものから、全ての学校の Web ページを検索できる「学校検索」や、全ての政府機関のページを検索できる「検索省」、1500 名が登録するスクールテックメーリングリストや、企業との共同開発のソフトウェア情報、教科書会社と共同作成の教材解説書、など、国立の学校で公開していいのかどうか怪しいものまで、ありとあらゆるものを公開している（もちろん著作権・肖像権の侵害となるものは掲載していません）。合計のページ数はすでに数えられず、データ量も数百 M バイト以上ある。

対外的な情報公開を意識している面も少ないが、子どもたちにできるだけ「今」の状況を見せたいし、学校が世間と比較して遅れていると思わせたくないという気持ちがある。また、教育の記録を、できるだけ実践的に、事実として残したいという点も気にかけている。94 年からの Web 掲示板の記録も残っているが、これは附属中にとって大変な財産であると思っている。

さらに、少し前までは、Goo にて「学校」「教育」「学部」「インターネットと教育」などのキーワードにて検索をおこなうと、数百万ペ

ページのトップでちばふのページがヒットした。学校の情報公開という意味では、非常に成功していると自負している。

7. 生徒の Web ページの公開の実際

全生徒に Web ページを公開させているが、以下の手順をふむ。

- 1) ユーザ名(電子メールアドレス) パスワードを全員に発行し、NT および UNIX 上に、全員のホームディレクトリを作成する。Web ページの公開は、public_html ディレクトリに保存すれば即公開できるプロバイダ形式だが、samba の利用により FTP は行わない。
- 2) 基本的なコンピュータの利用方法について学習する。
- 3) 著作権や個人情報の問題についてかなりつまんだ授業をおこなう。
- 4) テーマ決め、計画等を入念におこなわせる。

危険な点、加害者、被害者にならないようにするにはどうすればよいか、などを中心に十分指導をおこなう。その後、全員が Web で情報発信をしてみる、という授業展開となり、全員が Web ページをもつ、という教育実践をおこなっている。

8. 問題事例

長い経過の中では事件などもある。以下はほんの一例であるが、事件の例とその対応を紹介する。

有名タレントと同姓同名の生徒がおり Goo で調べた東京の高校生のおっかけがやってきた。> Goo にいって該当 URL (当校の URL) を削除してもらった。

生徒のチャットあらし > 日常茶飯事になりかけ全校集会など開き厳しく指導。ログなどを解析し徹底調査。

生徒作成の Web の著作権違反 > 相手からの通報によりわかる場合が多いが即対応し該当ページを削除、生徒に説明をおこなう。

生徒作成の Web から、18禁ページのリンク > 即時削除し、場合によっては該当生徒のアカウント停止、いっさいのコンピュータ使用禁止などのペナルティー

このような問題は 1 年に 2, 3 回起きているが、対処方法さえ間違えなければ、怖がる必要はない。ログの解析も含めて、子どもを常にウォッチしておくことが大切である。

9. Web サイトの継続的運用

正直なところ、趣味でやっているうちは全く負担にならないが、正規の仕事として、他の学校業務と兼務するなどして、Web を「公開しなければならない」という義務感が生まれれば、やる気がなえてくる。好きでないなら、あるいは、よくしよう、役立つものを作ろう、公開していこう、という気持ちがないならば、専門の人がいなければ難しいと思う。

10. 子どもにとっての「入り口」となることを目指して

学校の Web ページの公開は、教育的な効果は別として、学校の情報公開や対外的な貢献としてのサービスの提供、保護者や地域へのサービス提供という意義が大変大きく、コストもかからず大きな効果がある。当然リスクも高いが、リスクをうわまわる魅力がある。

生徒の実態として、いまだき Web など子どもにとっては全く珍しいものではない、という点は確実に言えるし、自分の学校にホームページがあることは不思議とは思わない。このような状況の中で、生徒にとって WWW の世界への「入り口」となるべく学校 Web が効果を発揮できれば理想的ではないだろうか。

「入り口」としては、今後は、携帯電話への対応なども探っていく必要があるだろう。

蛇足となるが、Web の教育利用については、基礎的基本的学力の向上については期待していない。むしろ、社会性を身につける道具として、また、コミュニケーション能力を開発するきっかけを得るものとして期待している。学校の壁を越えて、外とふれあいながら、より社会的な、実践的なものの考え方を学ぶ機会が増え、それが子どもにとっては「生きる力」となるのではないかと、という点に期待を寄せている。教科書では知ることのできないことを知ることができる、家庭で Web を見ても遊びにしか使わないが、こういう使い方もできるんだ、という点を、少しでもよいので子どもに伝えることができれば、成功ではないかと考えている。

当校のドメイン内サイト：

ちばふ代表

<http://www.jr.chiba-u.ac.jp/>

内部向け

<http://naibu.jr.chiba-u.ac.jp/>

「共生」

<http://sougou.jr.chiba-u.ac.jp/>

生徒会 <http://seitokai.jr.chiba-u.ac.jp/>

学校要覧 <http://youran.jr.chiba-u.ac.jp/>

Web メール

<http://www.jr.chiba-u.ac.jp:8888/>

教育実習ページ

<http://practice.jr.chiba-u.ac.jp/>

PTA ページ

<http://pta.jr.chiba-u.ac.jp/>

全生徒

<http://www.jr.chiba-u.ac.jp/seito.html>

(ユーザ(1000名程度)全員が、URL
に「～ユーザ名」という形式で公開)

技術科 <http://tech.jr.chiba-u.ac.jp/>

(他教科全てあるが、ホスト名を教科
名としています)

学校検索

<http://sagasu.jr.chiba-u.ac.jp/>

みつけた

<http://sagasu.jr.chiba-u.ac.jp/mikke.html>

検索省 <http://st.jr.chiba-u.ac.jp/mos/>

開隆堂教材解説書

<http://kairyudo.jr.chiba-u.ac.jp/>

マイクロソフト共同開発ソフトウェア

<http://ms.jr.chiba-u.ac.jp/>

『インターネットと教育』フォーラム

<http://forum.jr.chiba-u.ac.jp/>

スクールテック ML

<http://st.jr.chiba-u.ac.jp/>

夏休み特別企画 8月26日・27日 『インターネットと教育』フェスティバル 2000 http://festival.jeric.gr.jp/
--